

ふたつの龔開画

当館収蔵の中国書画コレクションにおいて、ひととき異彩を放つ1点がこの龔開筆「駿骨図卷」(以下、大美本)である。ひどく痩せた馬の腹には15本の肋骨が浮き出しており、自跋によれば「千里の異」、すなわち一日に千里を走るという常ならざる駿馬の姿を表わしたという。作者の龔開(1221~1307?)は、字を聖予、号を翠巖といい、淮陰(江蘇省淮陰)の人。南宋の景定年間には両淮制置司監であったが、元になってからは入仕せず遺民として過ごした。その画は人となりとともに同時代より多くの人士に愛され、本作にも歴代の名士の跋が連ねられている。大美本については、かつて当館の紀要において当時学芸員であった中川憲一氏によって仔細な検証がなされている(1982年)。近日、機会があって本作について取り組んでいるが、なかなか難解、あらためて先学の労と熱意に頭の下がる思いである。

本作をみていく中で、先の紀要では不明とされていた数顆の印のうち、後肢蹄の傍にある「臥雪斎藏」(白文方印)と「笙巢真賞」(朱文方印)の二顆が、アメリカ・ワシントンD.C.にあるフリーア・ギャラリー所蔵の龔開筆「中山出遊図卷」(以下、フリーア本)にも捺されていることに気がついた。フリーア本もまた古くより人口に膾炙し、大美本とならんで現存する龔開の代表的な作例として知られている。フリーア・ギャラリーでは、公式サイト内において所蔵の宋元書画について全図と釈文、英訳を公開しており(2007年公開)、その成果を参照すると先の二顆は曾協均なる人物の収蔵印と推定されている。

曾協均は、字を舜臣、号を笙巢といい、江西南城の人。駢儷文の名家として知られる曾燠(1759~1831)の子である。生卒年ははっきりとしないが、清朝末の道光から同治年間に活躍した。李玉榮『甌鉢羅室書画過目考』の光緒二十(1894)年の自序をみると「景劍泉閣学其濬・曾笙巢侍御協均に就正し、両家の秘笈を探索するに、聆奇瞬美、晷旦疲れず、夜分枕に就くも、展転して精思す……」と回想している。生来書

画に深い関心を寄せていたという李玉榮が、収蔵家・賞鑑家としても知られていた景其濬とならんであおぎ、秘蔵の逸品をみせてもらったというのだから、曾協均も相当の収蔵家であったようである。

大美本とフリーア本は、収蔵印や跋文をみるに作家の手を

はなれてからはそれぞれ別の来歴をたどっているが、清代になって大収蔵家・高士奇(1645~1704)のもとで一度巡り合っている。フリーア本に附された高士奇の康熙庚辰(1700)年の跋には、「丁丑(1697)の冬、余は養を請い初めて還り、呉門(蘇州)に於いて其の《羸馬図》を得たり。今年六月又た其の《中山出遊図》を得たり……」とあり、一方、大美本に附された康熙戊寅(1698)年の跋には「去年の冬、余の舟呉を過ぎるに、其の《羸馬図》を得たり。楊鐵厓・倪雲林の跋与に有りて、更に珍藏に足るなり……」とある。この二跋から、高士奇がフリーア本《中山出遊図》に先立って入手した《羸馬図》が、まさに大美本であったことがわかる(ちなみに大美本には、跋に謂うように楊維禎と倪瓚の跋が附されている)。

その後、二作はふたたび別々の途をたどることとなった。よく知られているように、大美本は清の内府に入って乾隆帝の賞翫するところとなり、一方フリーア本は市井で愛玩され幾人かの収蔵家の手を経た。清末から民国初期の混乱期における文物流出の中で、一方は日本へ、もう一方はアメリカへと渡ることとなったが、ちいさな二顆の証言を聞けば、その前夜に曾協均の秘笈裏でつかの間の再会を果たしていたかもしれない。

現在、二作は遠く離れたふたつの美術館に収蔵されているが、近年では2010年にニューヨークのメトロポリタン美術館で開催されたThe World of Khubilai Khan: Chinese Art in the Yuan Dynasty展において、海を越えて一堂に会している。また、龔開の代表作としてわたしたちの脳裏ですでに深く結びついている。700年以上ものときの中で、幾たびの流転を繰り返し今ここにある龔開画を前に、当館が本作の安住の地であり続けるよう意識をあらため、またそう願ってやまない。老大家を相手にするにはあまりにも心もとないが、今しばらく大美本に向かい真摯に耳を傾けたいと思う。

(森橋なつみ)



曾協均収蔵印
上:「笙巢真賞」、下:「臥雪斎藏」



龔開 駿骨図 元時代・13-14世紀 本館蔵(阿部コレクション)